

公的資金補償金免除繰上償還に係る公営企業経営健全化計画

I 基本的事項

1 事業の概要

特別会計名：玉村町水道事業

事業名	末端給水事業（上水道事業）		
事業開始年月日	昭和49年3月30日	地方公営企業法の適用・非適用	<input checked="" type="checkbox"/> 適用 <input type="checkbox"/> 非適用
団体名*	玉村町	職員数*（H19. 4. 1現在）	7
構成団体名			

注 1 事業を実施する団体が一部事務組合等（一部事務組合、広域連合及び企業団をいう。以下同じ。）の場合は、「団体名」欄に一部事務組合等の名称を記載し、「構成団体名」欄にその構成団体名を列記すること。

2 「職員数」欄には、当該事業に従事する全職員数を記載すること。

2 財政指標等

資本費	62（H18）	公営企業債現在高（百万円）	2,259
累積欠損金（百万円）	3	利益剰余金又は積立金（百万円）	182
不良債務（百万円）	0	財政力指数*	0.78
資金不足比率（%）	0	実質公債費比率*（%）	8.3
		経常収支比率*（%）	92.4

注 平成17年度（又は平成18年度）の公営企業決算状況調査、地方財政状況調査等の報告数値を記入すること。

なお、財政力指数、実質公債費比率及び経常収支比率は、当該事業の経営主体である地方公共団体の数値を記載し、当該事業が一部事務組合等により経営されている場合は、その構成団体の各数値を加重平均したものを記載すること。（ただし、旧資金運用部資金及び旧簡易生命保険資金について対象としない財政力1.0以上の団体の区分については構成団体の中で最も低い財政力指数を記載すること。）

3 合併市町村等における公営企業の統合等の内容

<input type="checkbox"/> 新法による合併市町村、合併予定市町村における公営企業の統合等の内容 <input type="checkbox"/> 旧法による合併市町村における公営企業の統合等の内容 <input checked="" type="checkbox"/> 該当なし

注 1 「新法による合併市町村、合併予定市町村」とは、市町村の合併の特例等に関する法律（平成16年法律第59号）第2条第2項に規定する合併市町村及び同条第1項に規定する市町村の合併をしようとする市町村で地方自治法（昭和22年法律第67号）第7条第7項の規定による告示のあったものをいう。

2 「旧法による合併市町村」とは、市町村の合併の特例に関する法律（昭和40年法律第6号）第2条第2項に規定する合併市町村（平成7年4月1日以後に同条第1項に規定する市町村の合併により設置されたものに限る。）をいう。

3 □にシを付けた上で内容を記載すること。

4 公営企業経営健全化計画の基本方針等

区分	内容
計画名	玉村町上水道事業経営健全化計画
計画期間	平成19年度から平成23年度
計画策定責任者	玉村町水道事業管理者 玉村町長 貫井孝道
既存計画との関係	玉村町集中改革プラン（平成17年度から平成21年度）
公表の方法等	広報・玉村町ホームページ・議会へ説明予定
基本方針	経営の健全化に向け、水道料金の定期的見直し及び確実な収納、支出経費を節約しながら経営の効果を最大限生かし、企業努力をする。

注 計画期間については、原則として平成19年度から23年度までの5か年とすること。

I 基本的事項（つづき）

5 繰上償還希望額等

（単位：百万円）

区 分		年利5%以上6%未満	年利6%以上7%未満	年利7%以上	合 計
旧資金運用部資金	繰上償還希望額			90	90
	補償金免除額			12	12
旧簡易生命保険資金	繰上償還希望額			0	0
公営企業金融公庫資金	繰上償還希望額			38	38

注 「旧資金運用部資金」の「補償金免除額」欄は、各地方公共団体の「繰上償還希望額」欄の額に対応する額として、計画提出前の一定基準日の金利動向に応じて算出された予定額であり、各地方公共団体の所在地を管轄とする財務省財務局・財務事務所に予め相談・調整の上、確認した補償金免除（見込）額を記入すること。

6 平成19年度末における年利5%以上の地方債現在高の状況

【旧資金運用部資金】

（単位：千円）

事業債名		年利5%以上6%未満 (平成21年度末残高)	年利6%以上7%未満 (平成20年度末残高)	年利7%以上 (平成19年度末残高)	合 計
公 営 企 業 債	上水道事業	40,145		90,495	130,640
合 計 (A)		40,145	0	90,495	130,640
※ 一般 会計 のうち (再掲)					
合 計 (B)					
公営企業で負担するもの (A)-(B)		40,145	0	90,495	130,640

【旧簡易生命保険資金】

（単位：千円）

事業債名		年利5%以上6%未満 (平成21年度末残高)	年利6%以上7%未満 (平成21年度末残高)	年利7%以上 (平成20年度9月期残高)	合 計
公 営 企 業 債					
合 計 (A)					
※ 一般 会計 のうち (再掲)					
合 計 (B)					
公営企業で負担するもの (A)-(B)					

【公営企業金融公庫資金】

（単位：千円）

事業債名		年利5%以上6%未満 (平成20年度9月期残高)	年利6%以上7%未満 (平成20年度9月期残高)	年利7%以上 (平成19年度末残高)	合 計
公 営 企 業 債	上水道事業			37,503	37,503
合 計 (A)				37,503	37,503
※ 一般 会計 のうち (再掲)					
合 計 (B)					
公営企業で負担するもの (A)-(B)				37,503	37,503

注1 地方債計画の区分ごとに記入すること。  
2 必要に応じて行を追加して記入すること。

## II 財務状況の分析

区 分	内 容
財務上の特徴	<p>1、収益的収支 近隣市町村より水道料金が低く財政的にも困難だったため、平成17年4月1日水道料金を値上げ改定した。これにより、平成17年度から料金収入が増加した。また現在、県央第二水道から受水量を増加してゆくことで、水を購入している。しかし、当町の人口が計画時のように増加していないので、受水量増加は、単純に経営悪化につながる。</p> <p>2、資本的収支 水圧改善工事が終了したため、企業債の借入が行われなくなった。今後は、人口増が落ち着いているので新規敷設は少なく、老朽管更新工事を行ってゆけば、借入せずとも経営可能のようだ。</p>
経営課題	<p>課 題 ① 水道の随時開閉、月々の検針業務および料金請求・滞納徴収業務を業者委託にすることによって、職員数の削減、未収料金の減少を期待する。</p> <p>課 題 ② 今後の人口増加が見込まれないので、県央第二水道からの受水量を一定で契約し、支払水道料を増加させない。</p> <p>課 題 ③ 使用施設がすべて老朽化しているので、計画的に順序だてて修繕し、突発的事故で全て修繕にならないようにする。</p> <p>課 題 ④</p> <p>課 題 ⑤</p>
留意事項	

注1 「財務上の特徴」欄は、事業環境や地域特性等を踏まえて記載すること。また、経営指標等について経年推移や類似団体との水準比較などを行い、各自工夫の上説明すること。

2 「経営課題」欄は、料金水準の適正化、資産の有効活用、給与水準・定員管理の適正合理化、維持管理費等サービス供給コストの節減合理化、資本投下の抑制、民間的経営手法等の導入等、団体が認識する経営上の課題について、優先度の高いものから順に記載する。また、経営課題と認識する理由を類似団体等との比較を交えながら具体的に説明すること。

3 「留意事項」欄は、「経営課題」で取り上げた項目の他に、経営に当たって補足すべき事項を記載すること。

4 必要に応じて行を追加して記入すること。

Ⅲ 今後の経営状況の見通し (①法適用企業)

(1) 収益的収支、資本的収支

(単位: 百万円, %)

年 度		平成18年度 (計画前年度) (決算)	平成19年度 (計画初年度)	平成20年度 (計画第2年度)	平成21年度 (計画第3年度)	平成22年度 (計画第4年度)	平成23年度 (計画第5年度)
区 分	1. 営 業 収 益 (A)	564	588 622	550 613	559 613	570 613	571 613
	(1) 料 金 収 入	545	545 561	533 572	519 572	522 572	530 572
	(2) 受 託 工 事 収 益 (B)	17	41 60	16 40	39 40	47 40	40
	(3) そ の 他	2	2 1	1	1	1	1
	2. 営 業 外 収 益	4	3	4 3	4 3	4 3	3
	(1) 補 助 金						
	他 会 計 補 助 金						
	そ の 他 補 助 金						
	(2) そ の 他	4	3	4 3	4 3	4 3	3
	収 入 計 (C)	568	591 625	554 616	563 616	574 616	574 616
	1. 営 業 費 用	449	493 562	438 454	446 460	448 433	426
	(1) 職 員 給 与 費	48	46	31 36	32 36	30 37	37
	基 本 給	25	24	18 19	19	17 19	19
	退 職 手 当						
	そ の 他	23	22	13 17	13 17	13 18	18
(2) 経 費	239	293 352	265 276	278	301 278	279	
動 力 費	35	36 38	40 38	34 39	35 39	40	
修 繕 費	31	38 44	39 32	48 32	39 32	32	
材 料 費							
そ の 他	173	219 270	186 206	196 207	227 207	207	
(3) 減 価 償 却 費	162	154 154	142	136	117 118	110	
2. 営 業 外 費 用	87	81 81	67 69	64 66	60 63	60	
(1) 支 払 利 息	87	81 81	67 69	64 66	60 63	60	
(2) そ の 他							
支 出 計 (D)	536	574 633	505 523	510 516	508 496	486	
経 常 損 益 (C)-(D) (E)	32	17 -8	49 93	53 100	66 120	88 130	
特 別 利 益 (F)			1				
特 別 損 失 (G)	29	30 5	4 5	2 5	2 5	5	
特 別 損 益 (F)-(G) (H)	-29	-30 -5	-3 -5	-2 -5	-2 -5	-5	
当 年 度 純 利 益 (又 は 純 損 失) (E)+(H)	3	-13	46 88	51 95	64 115	83 125	
繰 越 利 益 剰 余 金 又 は 累 積 欠 損 金 (I)	-3	-16	30 72	51 167	64 282	83 407	
流 動 資 産 (J)	282	318 253	355 233	404 229	376 231	239	
う ち 未 収 金	43	43	41 38	56 36	48 36	36	
流 動 負 債 (K)	51	64 30	59 29	70 29	63 29	29	
う ち 一 時 借 入 金							
う ち 未 払 金	51	64 30	59 29	70 29	63 29	29	
不 良 債 務 (L)							
累 積 欠 損 金 比 率 ( $\frac{(I)}{(A)-(B)} \times 100$ )	0.6	2.9					
不 良 債 務 比 率 ( $\frac{(L)}{(A)-(B)} \times 100$ )							
地 方 財 政 法 施 行 令 第 19 条 第 1 項 に よ り 算 定 し た 資 金 の 不 足 額 (M)							
営 業 収 益 - 受 託 工 事 収 益 (A)-(B) (N)	547	547 562	534 573	520 573	523 573	531 573	
資 金 不 足 比 率 ((M)/(N) × 100)							
資 本 的 収 入	1. 企 業 債		128				16 0
	2. 他 会 計 出 資 金						
	3. 他 会 計 補 助 金						
	4. 他 会 計 負 担 金						
	5. 他 会 計 借 入 金						
	6. 国 ( 都 道 府 県 ) 補 助 金			1			
	7. 固 定 資 産 売 却 代 金						
	8. 工 事 負 担 金						
	9. そ の 他	21	27 20	19 20	17 20	14 20	20
	計 (A)	21	155 148	20	17 20	14 20	36 20
	(A)のうち翌年度へ繰り越される支出の 財源充当額 (B)						
	純 計 (A)-(B) (C)	21	155 148	20	17 20	14 20	36 20
	1. 建 設 改 良 費	106	53 70	45 110	47 110	111 110	110
	う ち 職 員 給 与 費						
	2. 企 業 債 償 還 金	114	244	113 117	116 109	108 109	108
3. 他 会 計 長 期 借 入 返 還 金							
4. 他 会 計 へ の 支 出 金							
5. そ の 他	1	4	10	3	1	3	
計 (D)	221	301 314	168 227	166 219	220 219	221	
資 本 的 収 入 額 が 資 本 的 支 出 額 に 不 足 す る 額 (D)-(C) (E)	200	146 166	148 207	149 199	206 199	185 199	
補 て ん 財 源	1. 損 益 勘 定 留 保 資 金	196	145 162	147 203	148 195	184 195	147 194
	2. 利 益 剰 余 金 処 分 額						
	3. 繰 越 工 事 資 金						
	4. そ の 他	4	1 4	1 4	1 4	22 4	38 4
計 (F)	200	146 166	148 207	149 199	206 199	185 199	
補 て ん 財 源 不 足 額 (E)-(F)							
積 立 金 現 在 高	182	170 182	185 182	216 182	250 182	301 182	
企 業 債 現 在 高	2,259	2,143	2,030 2,026	1,914 1,917	1,806 1,808	1,714 1,700	
う ち 建 設 改 良 費 ・ 準 建 設 改 良 費 に 係 る も の	2,259	2,143	2,030 2,026	1,914 1,917	1,806 1,808	1,714 1,700	
う ち そ の 他 に 係 る も の							

(2) 他会計繰入金

(単位: 百万円)

年 度		平成18年度 (計画前年度) (決算)	平成19年度 (計画初年度)	平成20年度 (計画第2年度)	平成21年度 (計画第3年度)	平成22年度 (計画第4年度)	平成23年度 (計画第5年度)
区 分	取 益 的 収 支 分						
	う ち 基 準 内 繰 入 金						
	う ち 基 準 外 繰 入 金						
	う ち 料 金 収 入 に 計 上 す べ き 繰 入 等						
資 本 的 収 支 分	う ち 赤 字 補 て ん 的 な も の						
	う ち 基 準 内 繰 入 金						
	う ち 基 準 外 繰 入 金						
	う ち 赤 字 補 て ん 的 な も の						

## (3) 経営指標等

(単位:%)

		平成14年度 (計画前5年度) (決算)	平成15年度 (計画前4年度) (決算)	平成16年度 (計画前3年度) (決算)	平成17年度 (計画前々年度) (決算)	平成18年度 (計画前年度) (決算)	平成19年度 (計画初年度)	平成20年度 (計画第2年度)	平成21年度 (計画第3年度)	平成22年度 (計画第4年度)	平成23年度 (計画第5年度)					
資金不足比率	(%) (再掲)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0					
料金回収率 <sup>※</sup>	(%)	102.2	87.4	84.3	100.0	104.7	102.3	97.9	109.0	118.4	110.2	120.2	113.2	125.4	118.8	128.3
総収支比率(法適用)	(%)	101.9	89.4	85.6	100.0	106.0	103.0	98.7	109.7	117.8	110.4	119.4	113.0	124.2	118.1	126.7
経常収支比率(法適用)	(%)	101.9	89.4	85.6	100.0	106.0	103.0	98.7	109.7	117.8	110.4	119.4	113.0	124.2	118.1	126.7
営業収支比率(法適用)	(%)	134.2	110.6	101.6	119.7	126.6	121.0	114.2	126.5	138.4	127.8	139.8	130.4	145.8	137.6	148.4
累積欠損金比率(法適用)	(%) (再掲)		12.5	18.6	1.2	0.6	2.9									
収益的収支比率(法非適用)	(%) (再掲)															
不良債務比率(法適用)又は 赤字比率(法非適用)	(%) (再掲)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
繰入金比率	収益的収入分	(%)														
	うち基準内繰入金	(%)														
	うち基準外繰入金	(%)														
	うち料金収入に計上すべき繰入等	(%)														
	うち赤字補てん的なもの	(%)														
	資本的収入分	(%)														
	うち基準内繰入金	(%)														
	うち基準外繰入金	(%)														
うち赤字補てん的なもの	(%)															

注1 上記の各指標の算出方法については、次のとおりであること。

## (1) 資金不足比率 (%)

ア 地方公営企業法適用企業の場合＝地方財政法施行令第19条第1項により算定した資金の不足額／(営業収益－受託工事収益)×100

イ 地方公営企業法非適用企業の場合＝地方財政法施行令第20条第1項により算定した資金の不足額／(営業収益－受託工事収益)×100

## (2) 総収支比率 (%) = 総収益／総費用×100

## (3) 経常収支比率 (%) = 経常収益／経常費用×100

## (4) 営業収支比率 (%) = (営業収益－受託工事収益)／(営業費用－受託工事費用)×100

## (5) 累積欠損金比率 (%) = 累積欠損金／(営業収益－受託工事収益)×100

## (6) 収益的収支比率 (%) = 総収益／(総費用＋地方債償還金)×100

## (7) 不良債務比率(又は赤字比率) (%) = 不良債務(又は実質赤字額)／(営業収益－受託工事収益)×100

## (8) 繰入金比率 (%) = 収益的収入に属する他会計繰入金(又は資本的収入に属する他会計繰入金)／収益的収入(又は資本的収入)×100

## 2 上記指標のうち「料金回収率」は、水道事業(簡易水道事業を含む)、工業用水道事業及び下水道事業(下水道事業にあっては使用料回収率)について記載すること。

## (1) 水道事業、工業用水道事業に係る料金回収率の算出方法

・料金回収率 (%) = 供給単価※1／給水原価※2×100

※1 供給単価 (円/㎡) = 給水収益／年間総有収水量(工業用水道事業にあっては料金算定に係るもの)

※2 給水原価 (円/㎡) = (経常費用－(受託工事費＋材料及び不用品売却原価＋附帯事業費＋基準内繰入金(水道事業のみ)))／年間総有収水量(工業用水道事業にあっては料金算定に係るもの)

但し、簡易水道事業については下記によるものとする。

ア 地方公営企業法適用企業の場合 = (経常費用－(受託工事費＋材料及び不用品売却原価＋附帯事業費＋基準内繰入金＋減価償却費)＋企業債償還金)／年間総有収水量

イ 地方公営企業法非適用企業の場合 = (総費用－(受託工事費＋基準内繰入金)＋地方債償還金)／年間総有収水量

## (2) 下水道事業に係る使用料回収率の算出方法

・使用料回収率 (%) = 使用料収入／汚水処理費×100

(4) 収支見通し策定の前提条件

条件項目	収支見通し策定に当たっての考え方（前提条件）
1 料金設定の考え方、料金収入の見込み	平成17年度に1億円の増収を見込んで、税込で基本料金を609円から735円に超過料金額(1立方当)を99円から123円に値上げ改定した。
2 他会計繰入金の見込み	なし
3 大規模投資の有無、資産売却等による収入の見込み	なし
4 その他収支見通し策定に当たって前提としたもの	滞納徴収業務を業者委託にすることによって、職員数の削減、料金徴収の確実性を期待する。

注1 収支見通しを策定するに当たって、前提として用いた各種仮定（前提条件）について、各区分に従い、それぞれその具体的な考え方を記入すること。

2 必要に応じて行を追加して記入すること。

#### IV 経営健全化に関する施策

項 目	具 体 的 内 容
1 行革推進法を上回る職員数の純減や人件費の総額の削減	H18年4月1日機構改革により、水道課と下水道課の2課が統合され、課長は1名削減され、下水道係も1名の職員が削減された。
○ 地方公務員の職員数の純減の状況	集中改革プランでは、公営企業における定員管理の数値目標を3名の削減としている。うち、水道事業は2名であり、平成20年度に削減予定。
○ 給与のあり方	
◇ 国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与構造の見直し、地域手当のあり方	平成18年4月1日に給与構造改革を踏まえた給与構造の見直しを実施済み。また、地域手当については、国の基準に基づいている。(地域手当支給なし)
◇ 技能労務職員に相当する職種に従事する職員等の給与のあり方	該当する職員なし。
◇ 退職時特昇等退職手当のあり方	普通退職、勤奨退職とも平成17年度に退職時特別昇給を廃止しました。(施行日:平成18年4月1日)
◇ 福利厚生事業のあり方	平成18年度から玉村町職員共済会への公費負担金を職員給料4/1,000から3/1,000に減額。
2 物件費の削減、指定管理者制度の活用等民間委託の推進やPFIの活用等	
○ 維持管理費等の縮減その他経営効率化に向けた取組	今後の人口増加が見込まれないので、県央第二水道からの受水量を一定で契約し、支払水道料を増加させないようにする。(経営課題②)平成19年度から順序を決め、老朽化施設を補修改善し、突発的な大改修になって経営を圧迫しないようにする。(経営課題③)
○ 指定管理者制度の活用等民間委託の推進やPFIの活用	平成20年度から料金収納・検針業務を民間委託する予定。(経営課題①)

#### IV 経営健全化に関する施策（つづき）

項 目	具 体 的 内 容
3 コスト等に見合った適正な料金水準への引上げ、売却可能資産の処分等による歳入の確保  ○ 料金水準が著しく低い団体にあつては、コスト等に見合った適正な料金水準への引き上げに向けた取組	平成17年4月1日水道料金を増額改定した。
4 経営健全化や財務状況に関する情報公開の推進と行政評価の導入  ○ 経営健全化や財務状況に関する情報公開  ○ 行政評価の導入	広報・HPで公開している。  平成20年度から主要な項目について試行的に導入し、平成21年度に本格導入の方向で検討中である。
5 その他	料金の収納確保のため、平成20年度に検針・閉開栓、収納・滞納整理事務等を委託する。収納・滞納整理業務委託については、専門に収納業務を行う人員を確保できるので、各年度11,000千円の収益増を見込んでいる。（経営課題①）

- 注1 上記区分に応じ、「II 財務状況の分析」の「経営課題」に掲げた各課題に対応する施策を具体的に記入すること。その際、どの課題に対応する施策が明らかとなるよう、IIに付した課題番号を引用しつつ、記入すること。
- 2 上記に記入した各種施策のうち、当該取組の効果として改善額の算出が可能な項目については、「V 繰上償還に伴う経営改革効果」の「年度別目標等」にその改善額を記入すること。なお、当該改善額が対前年度との比較により算出できない項目（資産売却収入・工事コスト縮減など）については、当該改善額の算出方法も併せて上記各欄に記入すること。
- 3 必要に応じて行を追加して記入すること。



V 繰上償還に伴う経営改革促進効果

1 主な課題と取組み及び目標

課題	取組み及び目標
1 職員数の純減や人件費の総額の削減	(経営課題①) 水道の随時開閉、月々の検針業務および料金請求、また滞納徴収業務を業者委託にすることによって、職員数の削減、未収料金の減少を期待する。
2 経営効率化や料金適正化による繰越欠損金の解消等	(経営課題①、②) 現在、県央第二水道からの受水量による支払い水道料金が、およそ1億円あり、今後、増加になると財政を圧迫してくる。一定水量化を検討する。滞納・収納業務を企業へ業務委託することにより、専門的に収納業務ができるので未納料を減少させ、繰越欠損金の減少を目標にする。(経営課題③) 平成19年度から順序を決め、老朽化施設を補修改善し、突発的な大改修になって経営を圧迫しないようにする。
3 一般会計等からの基準外繰出しの解消等	なし
4 その他	

注1 上記各項目には、IIで採り上げた経営課題に対応する取組としてIVに掲げた経営健全化に関する施策のうち、それぞれ各項目に該当するものについて、その対応関係が分かるように記入すること。

2 必要に応じて行を追加して記入すること。

2 年度別目標等 ※ 次頁以下(1)から(5)までの各事業別様式を参考に、以下の考え方に沿って策定すること。

(各事業共通留意事項)

<p>1. 次頁以下の各事業別様式は、「年度別目標」を策定するに当たって参考となるよう例示的な様式を示したものであり、2に掲げた項目以外は必ずしも全ての項目に記入を要するものではなく、各団体の各事業の状況にあわせて記入可能な項目のみ記入し又は独自の取組に応じた項目を立てて記入することは差し支えないものであること。</p> <p>2. 各事業別様式は参考例示ではあるが、各様式中の「目標又は実績」欄の項目のうち、職員数、行政管理経費(人件費、物件費、維持補修費等)に該当する項目並びに累積欠損金比率及び企業債現在高は、年度別目標策定に際して必須項目とされているので漏れがないよう留意すること。なお、これらの項目のうち、職員数、行政管理経費については、各団体(事業)の取組状況に応じて、適宜、細分化(例:職員数→職種別に区分、正職員と臨時職員とを分離計上等)することは差し支えないこと。</p> <p>3. 「目標又は実績」欄の項目中、「職員数」については、前年度との比較によりその増減数を各年度の「増減数」欄に計上するとともに、計画期間中の「増減数」の合計は「計画合計」欄に計上し、計画前5年間の「増減数」の合計は「計画前5年間実績」欄に計上すること。</p> <p>4. 「目標又は実績」欄の項目の見直し施策実施に係る「改善額」は、原則として、当該見直し施策実施年度の前年度との比較により算出し、その改善効果がその後も継続するものとして、その後の各年度の改善額を計上すること。</p> <p>5. 4による「改善額」が対前年度との比較により算出できない項目、その改善効果が単年度に限られる項目(資産売却益、工事コスト縮減等)については、当該改善額のみ当該見直し施策の実施年度の「改善額」欄に計上すること。またその場合の改善額の算出方法について、IVの当該施策に係る「具体的内容」欄に併せて記入すること。</p> <p>6. 計画期間中に実施した見直し施策に係る「改善額」の合計については「計画合計」欄に計上すること。また、計画前5年間に実施した見直し施策に係る「改善額」の合計については「計画前5年間実績」欄に計上すること。</p> <p>7. 「改善額 合計」欄及び「計画前5年間改善額 合計」欄には、それぞれの期間に係る人件費(退職手当以外の職員給与費)その他改善額を計上することが可能なものの合計(「計画合計」及び「計画前5年間実績」それぞれの合計)を記入すること。その際、同一項目に係る内訳に相当するもの等を重複計上することのないよう留意すること。</p> <p>8. 「(参考) 補償金免除額」欄に記入する「補償金免除額」とは、計画提出前の一定基準日の金利動向に応じて算出された予定額(補償金免除(見込)額)であり、Iの「5 繰上償還希望額等」に記入した「旧資金運用部資金」の「繰上償還希望額」に対応する「補償金免除額」の「合計」欄の額を転記すること。</p> <p>9. 以上の他、各事業別様式において、記入を求められている経営指標その他の項目等については各事業別様式の指示(留意事項)に従うこと。</p> <p>10. 必要に応じて行を追加して記入すること。</p>
---

